2018年12月16日

心理学研究の素朴な引用によって差別的言動を正当化する行為に対する意見声明

今般，日本の大学，特に医学部の入学試験において，学力試験の成績の「調整」を試み，その際に，特定の属性（例えば，女性）に不利な扱いをしていた事例に関する，各大学からの「説明」「お詫び」が数多く公表されている。

本声明の主旨は，こうした事例をふまえ，心理学研究の素朴な引用によって差別的言動を正当化する行為全般に，心理学者有志として断固抗議することである。

心理学研究の素朴な引用によって差別的言動を正当化する行為が含まれる事例のうち，看過することができないものの1つが，順天堂大学医学部入試における面接評価基準である。以下，当該案件に関する第三者委員会「緊急第一次報告書」（資料1）の内容に基づき，われわれの見解を詳細に説明する。

第三者委員会「緊急第一次報告書」（資料1）において，「女性の方が精神的な成熟が早く，相対的にコミュニケーション能力が男性より高い傾向がある」がゆえに「調整」を行うとの主張が行われているのは，14ページの以下の部分である。

> （Ｅ）面接評価の傾向について
> 当委員会において行った本調査においては，面接評価の傾向について，面接担当教員を含む複数の教職員から，大学入試受験時点における男女を比較すると，女性の方が精神的な成熟が早く，相対的にコミュニケーション能力が男性より高い傾向があることから，女性受験者の面接点数は男性受験者に比して全般的に高い状況にある旨の説明がなされた。
> また，上記の旨の医学的検証を記載した資料として学術誌「Psychological Bulletin」の記事が当委員会に提出されるとともに，平成25年度から平成30年度にかけての順大医学部入試における一般Ａ方式二次試験における面接点につき，男女別面接受験者数，男女別平均点及び男女別面接点分布表が掲載された「医学部入試　一般Ａ方式二次試験　男女別面接点分布グラフ」と題する各種資料及びこれに関するｔ検定に基づく統計資料がそれぞれ提出された。

また同ページの脚注より，学術誌「Psychological Bulletin」[1]の記事は，

Cohn, L. D. (1991). Sex differences in the course of personality development: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, *109*(2), 252-266.

であることがわかる（資料2）。
当該論文は，メタ分析手法（複数の研究結果に基づき，主にそれぞれで得られた統計的分析の結果を統合・比較することで，より高い見地から分析する手法）を用いて児童期から成人期までのパーソナリティ発達と男女差を検討したものである。ここで用いられているパーソナリティモデルは，Loevingerの自我発達段階モデルと呼ばれるものであり，より望ましいパーソナリティの完成に向けていくつかの段階を想定している。この自我発達の程度は，Washington University

---

[1] 「Psychological Bulletin」は，世界でもっとも大きな心理学の学会であるアメリカ心理学会(American Psychological Association)が発行する査読つき学術雑誌で，主として，特定のテーマに関する多数の研究を収集・分析して研究動向をまとめ，展望する論文を掲載している。2016年のインパクトファクター（学術雑誌の影響度の強さを示す主要指標の1つ）は16.793で心理学の学術雑誌の中で2位にランクされている。

Sentence Completion Test（WUSCT）と呼ばれる文章完成法検査によって測定されている。この検査による得点が低いことは，衝動性の高さ，青年期の妊娠の可能性，権威主義的傾向の高さ，逸脱行動の高さ，道徳的理解の低さなどに関連するとされている。そして全体としてこの得点が高いことは，青年期において社会的に適切な行動をとりやすいことを表しており，それがいわゆるコミュニケーション能力を測定するものではないことは明白である。またメタ分析の結果は，思春期において男性よりも女性の方がこの得点が高い傾向にあり，成人期にかけてその差が見られなくなっていくことを示している。論文の著者はその理由として，第1に女性の方が言語的に成熟しやすい可能性を挙げているが，先行研究からその可能性は否定されると述べている。第2に，男性よりも女性のほうが思春期における身体的な成熟が早いことを挙げているが，身体的成熟とパーソナリティの成熟は複雑な関係であり不明瞭な点が多いことも指摘されている。そして第3に，もっとも可能な解釈として，男女の社会的経験の差異を挙げている。この第3の考察は，男児と女児の社会の中での扱われ方が，この自我発達の男女差に反映する可能性を示すものである。このことは，この研究が行われた文化や時代背景（検討対象となった論文は1970年代から80年代）が結果に影響する可能性を示唆している。以上のことから，本論文は「女性の方が精神的な成熟が早く，相対的にコミュニケーション能力が男性より高い傾向がある」という知見を提出したものではなく，本研究の結果をわが国の思春期・青年期発達の男女差に盲目的に当てはめることは避けるべきであり，また，医学的検証がおこなわれたものでもないといえる。

また，著者のCohn氏も，朝日新聞社の取材に応えて「私の研究内容との関連がわからない」「『コミュニケーション』や言語能力の性差を調べたものではない」と言明している（資料3）。

つまり，**当該論文の内容が十分な精査を経ることなく「根拠」として用いられている**ことは明白であり，その態度は非科学的であると言わざるを得ない。

また，たとえ当該論文が「女性の方が精神的な成熟が早く，相対的にコミュニケーション能力が男性より高い傾向がある」ことを示すものであったとしても，それは心理学における性差に着目した研究がほぼすべてそうであるように，性という観点で対象を群にわけ，平均値をベースとして群間比較を行うものであり，全体的な傾向に差があることを示すものである。決して，**個別の人物評価（例えば合否判定）に一律に当てはめるべきものではない**。

さらに，「Psychological Bulletin」の発行母体たるアメリカ心理学会は，2005年10月に，パーソナリティ，認知，リーダーシップといった人間の基本的な特性や心理的・行動的特徴について，大きな性差はないとする見解を表明して，社会に根強く存在する，いわれなきジェンダーバイアスを強く非難している（資料4）。われわれもこれを強く支持するものである。

総じて，性差のような群間差を根拠なく想定し，それにより生じた選抜の不公平を正当化するために，決してそれを主張しているわけではない心理学研究論文を「根拠」と主張する行為全般に，心理学者として強く抗議する。

心理学者有志

小塩真司（早稲田大学文学学術院）
尾見康博（山梨大学大学院総合研究部）
平石界（慶應義塾大学文学部）
三浦麻子（関西学院大学文学部）
山田祐樹（九州大学基幹教育院）

（五十音順）

2018年12月16日

声明公表後，ご参加下さった有志の方々

下坂剛（四国大学生活科学部）・森永康子（広島大学）・川浦康至（なし）・樋口匡貴（上智大学総合人間学部）・北岡明佳（立命館大学）・小森政嗣（大阪電気通信大学）・長岡千賀（追手門学院大学）・大久保街亜（専修大学）・森本裕子（広島修道大学）・荷方邦夫（金沢美術工芸大学）・清水裕士（関西学院大学）・井川純一（大分大学経済学部）・澤幸祐（専修大学人間科学部）・鳥山理恵（東京大学）・四本裕子（東京大学）・菅井篤（開智学園開智望小学校）・小川一美（愛知淑徳大学）・久木山健一（九州産業大学）・一言英文（福岡大学）・齊藤俊樹（東北大学医学系研究科）・北村英哉（東洋大学）・犬塚美輪（東京学芸大学）・武田美亜（青山学院女子短期大学）・竹内豪志（東京大学大学院）・福山寛志（鳥取大学）・原田知佳（名城大学）・草野広大(University of Nevada, Reno)・村山綾（近畿大学）・小杉考司（専修大学人間科学部）・岡本卓也（信州大学）・土屋耕治（南山大学）・大坪庸介（神戸大学）・伊藤君男（東海学園大学心理学部）・藤村まこと（福岡女学院大学）・毛新華（神戸学院大学心理学部）・金明秀（関西学院大学）・稲増一憲（関西学院大学）・森久美子（関西学院大学）・田渕恵（中京大学）・日高聡太（立教大学）・杉原保史（京都大学学生総合支援センター）・津村健太（帝京大学）・新美亮輔（新潟大学）・藤島喜嗣（昭和女子大学）・宇井美代子（玉川大学）・難波修史（広島大学(+UCL)）・高瀬堅吉（自治医科大学）・橋本剛（静岡大学）・後藤崇志（滋賀県立大学）・小川洋和（関西学院大学）・徳岡大（高松大学）・甲田菜穂子（東京農工大学）・奥村太一（上越教育大学）・木戸彩恵（関西大学）・林大輔（愛知淑徳大学）・蒲池みゆき（工学院大学）・児玉佳一（大東文化大学）・岡田努（金沢大学）・小山内秀和（浜松学院大学）・渡部麻美（東洋英和女学院大学）・布施光代（明星大学）・斎藤和志（愛知淑徳大学）・紀ノ定保礼（静岡理工科大学）・古谷嘉一郎（北海学園大学）・倉矢匠（東洋大学大学院）・中間裕美子（東北医科薬科大学病院）・小森めぐみ（淑徳大学）・牛谷智一（千葉大学）

（ご登録順・敬称略）

※「有志」に加わっていただける方はフォームからご連絡下さい.

資料

1. 学校法人順天堂第三者委員会「緊急第一次報告書」 https://www.juntendo.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00027789.pdf&n=【公表版】緊急第一次報告書_印刷可.pdf（該当する記述はp.14の本文および脚注4）
2. Cohn, L. D. (1991). Sex differences in the course of personality development: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 109(2), 252-266.（論文は著者によりResearchgateで提供されており，PDFを無料ダウンロード・閲覧可能）
3. 仲村和代・山下知子・貞国聖子 (2018.12.14) 「コミュ力の性差，調べていない」　順大の根拠執筆の学者　朝日新聞デジタル
4. American Psychological Association (2005.10.20). Men and Women: No Big Difference: Studies show that one's sex has little or no bearing on personality, cognition and leadership. https://www.apa.org/research/action/difference.aspx

---

2018/12/22追加情報（付録へのリンク）

- Brief English Version by Kai Hiraishi （本声明の英語による抄訳）
- Letter from Dr. Cohn （引用された論文著者よりのコメント・日英対訳）